

地域資源としての小樽の銀行建築

信金中金月報掲載論文編集委員

齋藤 一郎

(小樽商科大学大学院 商学研究科教授)

日本が近代化への道を駆け抜けた明治から大正にかけて、港町小樽は北海道開拓の策源地としての繁栄を享受していた。いまでも、街なかをそぞろ歩けば、そこそこにノスタルジーが漂う。往時の小樽を醸しだしているのは、大正12（1923）年に完工した小樽運河と、そこに沿っては立ち並ぶ倉庫群かもしれない。あるいはまた、色内界隈に建てられた銀行建築かもしれない。海運会社や商社の社屋も残されている。小樽では、港湾・運河を取り巻くように陸海運、倉庫業、商社、銀行といった一連のビジネスが営まれ、そのことを物理的に映じた建築物の数々が、この街の生成-繁栄-衰退の記憶を留めている。商品生産とは異なり、人々の眼には映じにくい流通と金融に沸いた商都の記憶を、歴史的建造物が群れとなり、街区を形成することで可視化しているといってもよいだろう。

銀行建築に着目すれば、明治26（1893）年に建てられた旧第百十三国立銀行（後に、百十三銀行に改称）小樽支店をはじめ、旧百十三銀行小樽支店（明治41（1908）年新築移転）や旧日本銀行小樽支店、旧北海道銀行本店（いずれも明治45（1912）年の建築）が明治期の建造物として残されている。大正期に入ると、大正11（1922）年に旧三菱銀行小樽支店が、大正12（1923）年には旧北海道拓殖銀行小樽支店が、そして大正13（1924）年には旧第一銀行小樽支店と旧中越銀行小樽支店が建てられた。昭和初期では、旧三井銀行小樽支店が昭和2（1927）年に、旧安田銀行小樽支店が昭和5（1930）年に竣工した。建築年不詳ながら、旧第四十七銀行小樽支店も昭和初期に建てられたという。これらのほとんどは色内界隈に集中し、今日「北のウォール街」と称される街区を形づくっていった。

ここで注目したいのは、これら銀行の建築年だ。小樽市の歴史的建造物として指定を受けている12の銀行建築のうち、8つが戦間期に建てられている。第一次世界大戦中、日本は大戦景気に沸き、小樽もその渦中であって、空前の繁栄をみた。だが戦後、ヨーロッパ製品がアジア市場に戻ってくると、輸出は一転不振となり、過剰生産から大正9（1920）年には戦後恐慌が起こる。後に恐慌は回復へと向かうのだが、そうした動きに水を差さすように、大正11（1922）年には銀行恐慌が、大正12（1923）年には関東大震災に端を発する震災恐慌が相次

ぎ、日本経済は“慢性不況”の状態へと陥った。その後も、昭和2（1927）年には金融恐慌が、昭和4（1929）年には米株価の大暴落をきっかけとする世界恐慌（昭和恐慌）が起こる。昭和8（1933）年になり、日本経済はようやく恐慌前の経済水準に復したが、その頃から国家統制の影が差しはじめる。自由主義的な経済は終焉を迎えようとしていた。戦間期、銀行建築の掉尾を飾ったのは、旧小樽無尽（株）本店（昭和10（1935）年）である。

こうしてみると、現在、小樽がその身にまとうノスタルジーの原型は、戦間期というきわめて限られた時代に、繁栄というよりは、第一次世界大戦後の恐慌のなかで形づくられてきたようにも思える。“慢性不況”に直面した財閥系企業は、不況に抗うように独占化を推し進め、石炭生産では三井系の北炭が勢力を伸ばし、製紙・パルプでは王子製紙、金属工業では日本製鋼所が巨大化した。北洋漁業では日魯漁業、北千島漁業では日本水産の独占化が進み、林業では三菱鉱業、三井鉱山、住友本社が相次いで社有林経営をはじめている。この時期、小樽で財閥系銀行の支店進出が相次いだのも、そうした動きに呼応したものであろう。だが、昭和恐慌とそこからの脱却、そして戦時体制への移行という歴史の流れを顧みれば、戦間期に建てられた建築物は、自由経済の繁栄をみることなく、その後急速に変化する時代環境のなかで取り残されていった。そのことが、当時建てられた建築物の裡に、われわれがノスタルジーを見いだす要素のひとつとなっているのかもしれない。

小樽はいま、年間観客数が795万人（2015年度）に上るといふ。最大の観光スポットは小樽運河だ。その界隈を散策し、飲食あるいはガラス工芸体験などのアクティビティを通して、観光客は小樽を感じ、小樽で過ごす時間を楽しんでいることだろう。そこにおいて、小樽らしさを醸しだしているのは、間違いなく小樽運河であり、そこに隣接する一群の歴史的建造物の存在である。時の移ろいから取り残された建築物と、これにまつわるストーリーが、現在の小樽のイメージを形づくっているといっても過言ではない。

だが、取り残された建築物もやがて築後1世紀を迎えようとしている。その点では、如何にして、取り残されたものを取り残されたまま残すかということが、歴史的な遺産（空間）を観光資源とする小樽にとって最大の課題となるだろう。小樽のノスタルジーは、城郭や寺社仏閣のようにシンボリックな建築物に由来するものではなく、建築物が一群となって形成する空間、いわば街そのものが発しているところに、その特色がある。他方で、取り残された建築物のほとんどは、私的に所有され、その保持・保存は所有者の意志に委ねられている。建物の利用もなくなり、朽ちつつあるものもある。あるいは所有権の移転を機に、マンション等に建て替えられたものもある。私権との折り合いをつけ、取り残されたものを面的に残すことができなければ、小樽はいつか、小樽でなくなるかもしれない。